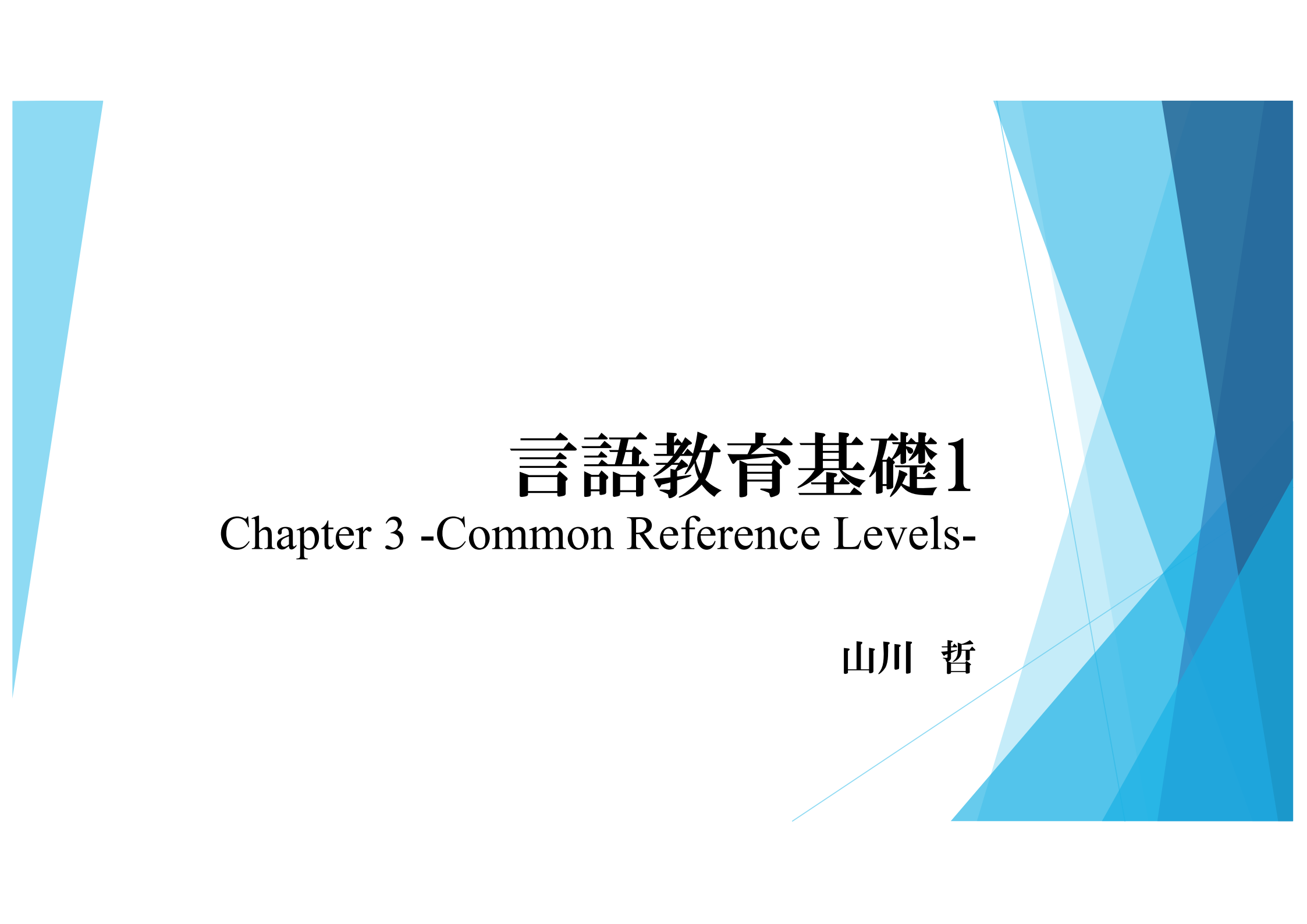




言語教育基礎1

Chapter 3 -Common Reference Levels-

山川 哲

3.1 Criteria for descriptors for Common Reference Levels

- CEFRの目的には、現在ある評価基準やテストで得られたproficiencyの記述を補助するというものがある。

→異なる資格どうしの比較が容易になる。
- CEFRの共通枠組み(common framework)では、4つの条件を満たすことが理想とされる(2つは記述に関するもの、もう2つは測定に関するもの)。

▶ 記述に関する問題 (Description Issues)

- CEFRは共通の尺度であり、あるコンテキストの制約を受けたり、個別的に作られるものであってはならない(=context-free)。
- 同時に、共通尺度の能力記述文はコンテキストに関連している必要もある(=context-relevant)。

→全てのコンテキストを反映している必要がある。

→様々なコンテキストの全てにおいて、「学習者は何ができるか」を記述したカテゴリーが通用する必要がある。

- 能力記述文は、言語能力の理論に基づいていなければならない。
 - ただ… 理論や研究は、こういった記述文の土台にするには適切でないものが多く、難しい。
 - ⇒それでも、カテゴリーや記述文は理論に基づいている必要がある。
- 加えて、記述文は使用者に使いやすくなければならない (user-friendly)。
 - 教育実践者(教師)にとって使いやすいということ。

▶ 測定に関する問題 (Measurement Issues)

- ある言語活動や言語能力が、共通の枠組みのどこに位置付けられるかというのは、理論に基づいて客観的に決定されなければならない (objectively determined)。
- 測定で用いるレベルは、適切な数で構成される必要があるが、どのコンテキストであっても、一貫した区別ができる数を超過することは許されない。

- これらの条件は、(1)直感的、(2)質的、(3)量的な方法を組み合わせることで達成できる。

↑↓

- 特定の機関による、直感のみに頼って作成する方法には弱点がある。
 - (i) 特定の言葉づかいが主観的になってしまう。
 - (ii) 分野の異なる使用者が、学習者のニーズに応じて、異なる視点から尺度を見ることがある。
- 尺度の妥当性を保証するために、共通参照レベルと能力記述文を開発する方法は非常に綿密なものとなり … (1)直感的、(2)質的、(3)量的な方法の組み合わせが用いられた。

- 
1. 当時の尺度の項目を、CEFRの能力記述文のカテゴリーと照らし合わせて分析した。
 2. (記述の)材料を編集し、新しい能力記述文を構成した。また、尺度そのものについて専門家が協議した。＜直感的な方法＞
 3. 質的な方法により、能力記述文のカテゴリーを教師が使えるか、また記述文が、実際にカテゴリーを正確に記述できているかを確認した。＜質的な方法＞
 4. それらの能力記述文の中で最も良いと判断されたものについて、量的な方法を用いて尺度化した。＜量的な方法＞

- 開発についての技術的な問題と、言語熟達度についての能力記述文の尺度は、付録で取り扱っている。

付録A：尺度や、CEFRを開発する際に採用した方法の紹介

付録B：共通参照レベルを開発したSwiss National Science Research Council project
と、例示的な能力記述文の概観

付録C：DIALANGプロジェクトについて（DIALANGはCEFRの自己評価に関する能力記述文を拡大適用した。）

付録D：ALTE（Association of Language Testers in Europe）の‘Can Do’プロジェクトについて（‘Can Do’プロジェクトは、共通参照レベルとの関連の中で能力記述文を開発し、有効性を立証している。）

※付録C・Dはヨーロッパのプロジェクトで、関連性がある。

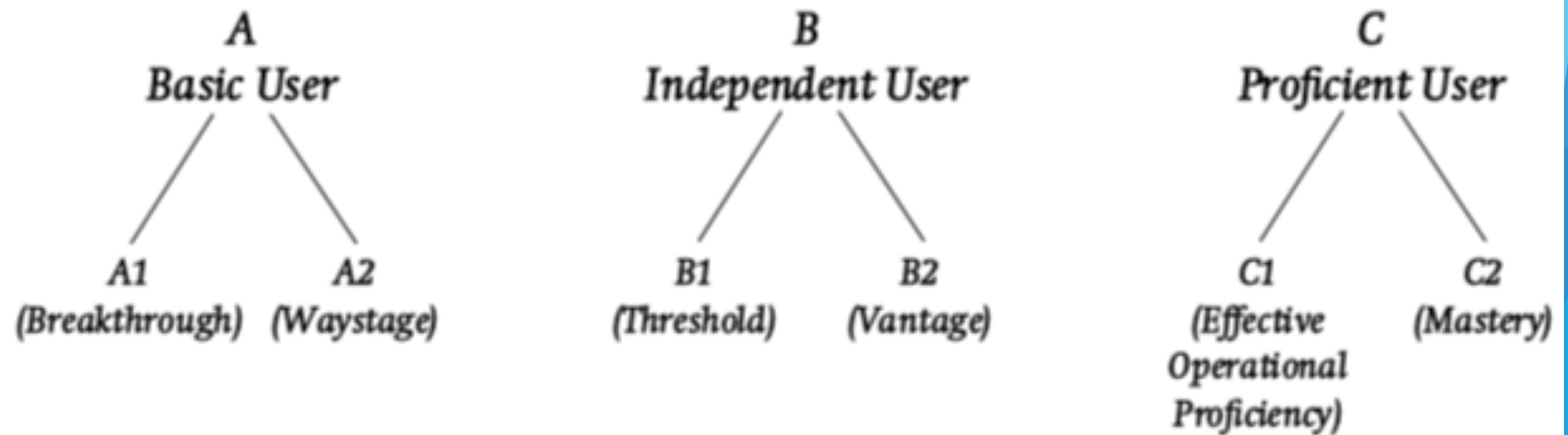
3.2 The Common Reference Levels

- 言語学習の組織化や達成度の認識における、レベルの数や内容については、広く一致していると言える。
- ヨーロッパの学習者に向けた6レベル

Breakthrough (1), Waystage (2), Threshold (3), Vantage (4),
Effective operational proficiency (5), Mastery (6)

→ 今までの「初級・中級・上級」をそれぞれ高・低の2レベルに分けたものと言える(Figure 1参照)。

► Figure 1



3.3 Presentation of Common Reference Levels

- CEFRLの共通参照枠は、異なる教育文化の異なる分野にいる教育担当者が、レベル分けの要素を構成し、記述するかを制限するものではない。
- また、共通参照における要点は、目的により異なる方法で提示されるのが良い(Table 1 (p.24)は、共通参照レベルの組み合わせを1つの段落にまとめて記したものである)。
 - 簡単な提示は、専門家以外の利用者にとってわかりやすい。
 - 実践的な教育システムに関わっている学習者や教師などにとってはより詳細な一覧が必要となる(Table 2 (p.26)は6つのレベルに基づいた自己評価の案である)。

- さらに、目的が異なれば、特定のレベルやカテゴリーに焦点を当てることも必要になってくる。

→レベルやカテゴリーの範囲を制限することで、より詳細なレベルやカテゴリーを設定することも可能になる(=意味があるものになる)。これらによってそれぞれのモジュール(≡基準になる測度)が関連づけられる。

- コミュニケーション能力に基づいた言語活動の評価を望むかもしれない。

→Table 3(p.28)は、スピーキング活動の評価向けに作成されたものである。